

### 1 自己評価及び外部評価結果

**【事業所概要(事業所記入)】**

事業所番号	1174500577		
法人名	社会福祉法人花園公益会		
事業所名	フラワーヴィラグループホーム		
所在地	埼玉県深谷市小前田2677		
自己評価作成日	令和3年4月12日	評価結果市町村受理日	令和3年6月13日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="https://www.kai.gokensaku.nhlw.go.jp/11/index.php">https://www.kai.gokensaku.nhlw.go.jp/11/index.php</a>
----------	---

**【評価機関概要(評価機関記入)】**

評価機関名	特定非営利活動法人 ケアマネージメントサポートセンター		
所在地	埼玉県さいたま市中央区下落合五丁目10番5号		
訪問調査日	令和3年4月23日		

**【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】**

・同一法人の特別養護老人ホームと併設していることから、医療的な対応や緊急時の体制などについては、特養の看護師の協力を得ていることで、グループホームの医療的弱みも対応できている。また、昨年度は、コロナ禍により実施する回数は少なかったが、グループホーム二階にある(花園テラス)地域開放施設を利用しての、カフェや、テラスランチ等を実施し、地域と関わる機会を設けることで、日頃外出の機会の少ない7利用者も、地域の方々との繋がりが途切れないうに過ごせる場所をつくっている。施設も20年を迎えたが、開設当初からの理念は、認知症になっても地域の中でいつまでも・ゆっくり、ゆったり、のんびりとであり、利用者のかかわりは、変わらず日々の暮らしの中でスタッフ一人ひとりが決して焦らないケアを目指し取り組んでいる。

**【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】**

・事業所周辺の環境も含めた「ゆったり・ゆったり・のんびり」の理念の基に、利用者が行いたい事や訴えたいことを否定することなく寄り添い、望まれることが実現できるように努められ、適度な距離感とバランス感覚を持った支援が実践されている。地域との交流が制限される中、「ふれあいの会」や「オレンジカフェ」への参加、多目的スペース「花園テラス」の地域への解放などが行われ、できる範囲での活動が継続されている。  
 ・運営推進会議は、参加メンバーを家族代表と施設内関係者に限定して開催され、利用者と事業所の状況やコロナウイルスの感染症予防対策などの意見交換が行われ、議事録を会議の外部メンバーに送られている。  
 ・目標達成計画については、法人合同と事業所単独の訓練が実施され、地域合同防災訓練にも主体的に参加され、地域の避難場所の役割も果たされてきたが、今年度は出来る範囲での訓練が行われ、コロナ禍が終息すれば、再開の予定とされており、目標達成への取り組みが伺える。

**V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します**

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外に行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

# 自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	開設当初から理念は変わらず、「ゆっくり・ゆったり・のんびり」とを念頭にその理念を常に共有しながら、決して焦らず、かかわり方を常に確認している。	事業所周辺の環境も含めた「ゆっくり・ゆったり・のんびり」の理念の基に、利用者が行いたい事や訴えたいことを否定することなく寄り添い、望まれることが実現できるように努められ、適度な距離感とバランス感覚を持って、過剰介護にならない支援が実践されている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一人として日常的に交流している	昨年度から、コロナ禍により交流の機会は少なくなったが、地域のふれあいサロンやオレンジカフェ等には積極的に参加できるようにしている。	積極的に多種の地域との交流が行われてきたが、コロナ禍によりできなくなった事も多い中で、「ふれあいの会」や「オレンジカフェ」への参加、多目的スペース「花園テラス」の地域への解放などが行われ、できる範囲で利用者と地域の高齢者を支える活動が継続されている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	認知症のひとと家族の会埼玉県支部と共催して、グループホームの2階スペースの利用し、認知症の方も一緒に「つどい」を開催したり、地域の方にも参加を促している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実践、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	年6回の開催の中、議題もマンネリ化してしまう恐れもあるため、出来るだけ家族参加もお願いし、要望や意見を発言してもらっている。その意見は、議事録の中で全スタッフに共有している。	多方面からの参加を得て開催されてきたが、現在は参加メンバーを家族代表と施設内関係者に限定して開催され、利用者や事業所の状況やコロナウイルスの感染防止策などの意見交換が行われ、議事録とお便りを会議の外部メンバーに送られている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	市の担当者はあまり参加できる機会はないが、地域包括や、支所とは出来るだけ密にとり参加できない時には、議事録を送付し内容を確認して頂くようにしている。	行政や地域包括支援センターと連携・協力しながらの催しは現在行えないが、質問や相談には適切な回答をいただいたり、共に考えていただくなど、良好な関係が構築されている。また、行政より感染症予防対策のための情報・マスク・消毒剤・手袋などの配布が行われている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	「身体拘束をしないケア」を実践し、年度初めには、施設長を中心にして基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解するための研修を実施する。また、2カ月に1回の身体拘束委員会を開催し、研修の機会を設けている。	2カ月に1回の身体拘束廃止委員会と各部署で職員から講師を募った研修会が開催され、同一法人の各事業所が共有の研修会とすることで、職員が受講の機会を逃すことがないように配慮されており、不適切な介護を見逃すことなく、身体拘束を必要としない支援が実践されている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	年2回の高齢者虐待防止の研修会は全スタッフで開催しているが、その他、近隣の施設と共同開催の研修会を実施し、高齢者虐待防止の研修会を実施している。まず、正しく理解することを実践している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	成年後見制度の利用者は現在のところいないが、権利擁護や成年後見制度については、研修を通してスタッフ間で学ぶ機会を持っている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	利用者、家族との十分な説明、話し合いの中で契約を締結している。必要があれば第三者の立場として包括支援センター職員にも出席を依頼することもある。利用者にとって納得のいく契約と解約を実施している		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	法人全体の家族会があり、年1回の家族会では、施設に対する積極的な意見交換を行なっている。その中で、家族の要望があった場合は、グループホームの会議に議題として取り上げスタッフ間で話し合う機会をその要望に沿えるように取り組んでいる	利用者とは日頃の関わりの中で、家族とはコロナ禍で面会が窓越しであったり、家族会が実施できなかったりしているが、来訪時やお便り・TELなどによりコミュニケーションを切らすことなく、意見や要望を汲み取り、できる限り要望に応えられるように努められている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	スタッフとは年2回の個人面談を実施している。その中で、本人が自由に話せる雰囲気づくりに心掛けている。また、スタッフの意見で、これは取り入れたいということは、スタッフ間で意見の共有を図り、実施に向けて検討している。	会議や個人面談の場だけでなく、管理者は常に声掛けに努められ、どのような内容のことで話し易く、意見や要望が検討を経て運営に活かされることも少なくはない。また、外部評価を全職員が記述することで、自分たちで考えることを身に付けられるように図られている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	毎年代表者、管理者、スタッフと面談する機会を設けている。自身のキャリアパスの実施に向け、努力目標を一緒に設定するとともにスタッフの仕事への姿勢等を把握している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	年間の研修計画に基づいた施設内研修を実施している。また、スタッフの経験やスキル等に応じてオンライン研修の受講等も併せて行い、スキルアップを目指している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	地域事業所(約10事業所)と交流を図る機会を作るため、事業所間で研修担当を決め、認知症の理解の研修会や、スタッフ間の交流会を実施している。昨年は、あまり機会はなかったが、今後できる限り開催をして行きたい。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入所前の本人の状況把握や、入所後本人の不安はないか等、スタッフは常に利用者の行動や精神的な変化の把握に努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	上記と同様に家族支援に心がけ、本人が利用することで家族自身にも心配事や、不安があることに気付いてあげられるような気遣いが必要である。そのためにもご家族のご希望がある限り、相談に乗り、要望を聴くことで家族との円滑な関係作りに努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	利用者、家族にとって、「その時」必要な支援は何かを常に考えながら関わり、支援が主観的にならないように気をつけている。また、認知症を抱えている利用者の情報をできるだけ汲み取るようにしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	常に本人の人格を尊重し、本人のできることは何か、また、したい事(望む事)は何かを知ることで、本人が生きがいを感じられるような暮らしの支援に努めている。時には、職員も一緒に取り組むことで互いの関係の構築を目指している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	できるだけ多くの情報を本人、家族やその他関係者から聴き、意見交換する中で、本人のできること、家族から大切にしてほしいこと等を共有し、皆で支えあうことを大切にしている。また、家族も施設に気軽に来られる雰囲気作りを継続していく事で、本人のみならず家族も支えられるような関係構築に努めている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	昔からの地域の関係性を途切れなく、入所する前からのなじみの関係性は出来るだけ大切にしていこうと心掛けている。参加できる人は、オレンジカフェや地域のふれあいサロンなどにも参加できるよう地域と連携をとっている。	利用者は地元の方が多く、友人や知人、親戚の来訪も多く、馴染みの関係が途切れることはない状況であったが、現在は、ガラス越しに携帯電話で話していただくなど、関わりのあった場所や人との関係が継続できるように支援されている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士の関係性は入所時からアセスメントをしっかりと実施し、一緒に参加できることはできるように対応している。また、個人を尊重することは、もちろん理念を念頭にゆっくり・ゆったり・のんびりと時間が利用者同士持てるように実施している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービス利用が、終了しても地域の中で暮らし続けている中での関係性は変わらない旨を伝えて、相談事などいつでも気軽に立ち寄れる場となれるような環境を整えている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用者一人ひとりの思いや意向は常に大切にすることはもちろんであるが、認知症がありご本人の意向が把握しきれない場合であっても、本人の望むことなどを職員が日々のかかわりから気づく努力をしている。また、家族からの情報も得ることで、本人本位に近づく努力をしている。	意思疎通の困難な利用者には、働きかけに対する反応や表情の変化を汲み取ると共に、家族からもたらされる情報も得て、職員の一方的な思い込みを廃し、1人ひとりの個性を尊重しつつも共同生活とのバランスに留意し、できることは叶えられるように支援がなされている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	在宅での暮らしの情報を聞き取り、その人の暮らしぶりや生活歴などを把握し、アセスメントや日々のケアに活かすようにしている。グループホームであっても在宅の生活環境からの変化を出来る限り少なくし、安心した生活を送れるよう支援する。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	利用開始時から、本人の把握に努め、個々に合わせた生活習慣を読み取ることで、本人の食事や排泄、普段の暮らしに対し少しでも安堵した生活が送れる様スタッフ一人一人が配慮している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	現在、コロナ禍において家族面会が難しい中、電話連絡を通して家族への情報伝達や要望の聞き取りをし、プランへの活用を進めている。本人は認知症を抱え、気持ちの変化が生じやすいため、職員間で情報共有を密に行い、本人中心のケアを目指したプランを作成している。	全職員による情報収集とモニタリングが行われ、出来ることと出来ないことも変化して行く中で、「どう生活するのか」を利用者・家族とも話し合い、計画作成担当者による介護計画が作成されている。また、毎月数名ずつの見直しが行われ、状態の変化へ対応が図られている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の様子を個人記録に記入し、その人にとっての課題があれば、職員間で情報を共有し合い、プランの見直しをする中でケアプランへとつなげている。また、変則勤務をする職員の情報交換は連絡ノートを使用し、常に共有している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	他者との対面での接触が難しい中でも、オンラインを通じた面会の実施など、出来る限りの工夫を凝らしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	本人が在宅時に使用していた郵便局やスーパーなど、地域に理解を促しながら、地域の中で出来るだけ楽しみながら暮らすということへ視点を置き、活用できるよう支援している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	グループホームに入所しても、かかりつけ医は本人や家族の希望を重視し、在宅からの関係の継続に努めている。また、かかりつけ医との話し合いは密にし、往診を希望される際には事前に医師や薬剤師と連絡を取り合う等、チームで本人を支援できるよう努めている。	入居前からの掛かりつけ医を優先すると共に、同一法人の特別養護老人ホームの嘱託医との連携が図られ、必要時には迅速に病院に繋がられている。また、通院時には必要に応じて職員が付き添ったり、薬剤師との連携が図られるなど、情報を共有した支援が行われている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	併設の特養看護師と連携し、本人の状態の変化や、日々の生活においてのわずかな気づきに対しても情報共有を行ない、素早い対応を行なっている。また、職員に対してもケアにおいて不安に思う点等、看護の視点からアドバイスをする等、適切な支援を行なっている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	利用者が入院された際は常にソーシャルワーカーと連携を取り、必要に応じ情報共有を図っている。また、退院時には各関係者とカンファレンスや現状の確認に努め、退院時もスムーズに支援を行なえるようにしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	本人、家族、関係者と重度化した場合や終末期に向けた方針について話し合い、事業所のサービスにおいてどこまで介護が可能か、本人にとってどこで過ごすことが最善か等を検討するとともに、今後の方針について事業所の出来る事を説明し、将来的なサービスの選択支援に努めている。また、併設特養とも連携しながら、チームで取り組む体制をとっている。	入居時に終末期に対して事業所ができることの説明が行われ、重度化した場合は、本人にとって何が最良なのかを医師を交えて家族との話し合いを何度も重ね、適切な選択ができるように支援をされている。また、終末期の対応は本人と家族が主体となり、事業所が支援するものであるとの方針が確立されている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	事故予防委員会やリスクマネジメント研修において、職員の意識付けや情報共有、技術向上を図っている。また、緊急時マニュアルの定期的な見直しを行い、各事業所で活用をしている。また、AEDの使用方法や訓練については業者を呼ぶ等もし、定期的に訓練をしている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	法人内の防災訓練と合同で、年2回の消防訓練を実施している。また、グループホーム独自で、夜間想定での防災訓練を実施している。定期的な訓練では一人一人が素早い判断が出来ているか、避難経路に不備は無いかなど確認している。自治会との連携を密にし、緊急時の対応に対しての協力依頼をしている。	年2回の防災訓練が実施されている。緊急時は各居室から直接外に避難ができる造りである。また、地域との防災協力協定が結ばれており、合同の防災訓練にも主体的に参加されてきたが、今年度は中止となった。コロナ禍が終息すれば、再開の予定とされている。	地域との合同防災訓練にも主体的に参加され、地域の避難場所の役割も果たして来りましたが、今年度は中止となりました。コロナ禍終息後の再開が期待されます。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	職業倫理として、本人の尊厳の保持はケアの基本であることを職員教育において継続的に伝達し、現場実践においても常に意識するよう注意している。また、本人の個性や生活歴等を良く知り、本人の理解を深めたうえで、誇りやプライバシーへ配慮した、一人一人の尊厳を保てるケアを心掛けている。	利用者が出来ることが少なくなってきたとしても、尊厳とプライドが守られ、今までの生活習慣を継続できるように支援がなされている。また、知られたくないことや聞かれたくないことにも注意が払われ、1人1人のプライバシーが守られている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	毎日の生活の中で、ぼつと発する言葉やしぐさを受けとめ、何を希望しているのかをくみ取れるように、日頃からコミュニケーションを密にする機会をスタッフ間で多くとれるように実践している。また、家族からも、入所時や面会時に思いを聞き取るよう心掛けている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	日々の中で一人ひとりのペースに応じた生活を最優先することが大事であるが、認知症という症状も受け止めながら規則正しい生活リズムにも注意を払い、本人の希望に沿った生活を送れるように支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	本人の希望に合わせて理美容を実施したり、起床時や、入浴時に洋服選びを一緒にする等、本人が好みを自分から発信出来るように支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事の準備などできる人には、本人にとって負担にならない程度にお手伝いをお願いしている。また、メニューについても、月に何度か選択食を取り入れて、好きなものを選ぶという、本人の意思を尊重する機会も食事からも得られるように実施している。	同一法人の特別養護老人ホームから提供される食材を基に、ボランティアの協力で栽培された季節の野菜などを加えて、事業所独自の調理がなされ、量と栄養のバランスが取れた食事が提供され、季節食や行事食の他、選択食の日も設けられ楽しみとなっている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	特養の栄養士に相談しながら、献立を考えたり、食事形態がとれるように実施している。また、本人の持っている力は、出来るだけ発揮して頂けるように個々の状態を常に把握できるよう心掛けている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	口腔ケアについては、定期的に訪問歯科に相談しながら、その人に応じたケアを実践している。また、毎日のケアについては、毎食後実施している。		



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	自立している方以外は出来る限り排泄の支援をし、本人の自尊心を傷つけないよう配慮をしている。その中で利用者一人一人の排泄の力や習慣を把握し、自立困難になってきている利用者に対しては、利用者や家族に相談しながらポータブルトイレの使用やパッド等を用意し、本人を支援している。	排泄習慣を把握し、自尊心を傷つけない適切な声掛けと誘導を行うことで、日中はトイレ排泄を基本とし、夜間は利用者それぞれの状況に合わせた最適な支援が行われている。入居前オムツ使用だった方が適切な支援により、トイレで排泄できるようになった事例も見受けられる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	献立を作る際に、便秘のことも頭に入れ、特に繊維質の多い食品を利用するように心がけ実践している。また、本人の生活ペースや体調等に応じて、体操や散歩等を行い、予防に努めている。認知症の軽度な利用者の方については、排便に関して本人の自尊心を傷つけない声掛けや聞き取りをしながら体調管理に努めている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴に関しては、その人の体調や気分に合わせて、決められた日だけにとられずに、本人の希望に合わせて入浴を実施している。	1人週3回を基本とし、利用者の希望や状況に応じて適切な入浴が行われており、小さい浴槽に改修が行われたので、ゆっくりした個浴を楽しんでいただけている。また、併設する特別養護老人ホームの機械浴を利用することも可能であり、安全な入浴が支援されている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	自宅で生活していた頃の生活習慣を大切に、本人の体調に合わせて自由に休めるようにしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	かかりつけ医や看護師と連携を密にして情報を共有し、服薬調整を行なっている。また、必ず服薬しているかのチェックを忘れず行うように努め、特に服薬が変わった時等の状態の変化は確認を怠らない。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	入所時に家族から情報をできるだけ集め、その人ができることは何かを把握して、興味が持てることを支援している。入所後もアセスメントを怠らず、本人の今の状態を把握して、今できる事をスタッフで共有し支援している。また、今まで地域で参加してきたことにも、継続して参加できるサポートにも努めている。時には以前から参加していたふれあいサロン等、地域に利用者と職員が一緒に出かけていくことで利用者が楽しめる環境を作っている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	一人ひとりの体調の様子を見ながら、お天気のよい日は出来るだけ屋外に散歩等に出かける機会を作っている。近隣のからの入所者も多いことから、散歩途中で声をかけてもらったりと、なじみの関係も作られている。	ドライブでの花見や少人数での日光浴、外気浴、散歩、敷地内の畑での収穫などが行われ、コロナ禍の中でも、事業所周辺の環境を利用し、出来る範囲の外出が行われ、利用者への適切な刺激と楽しみに繋げられている。	



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	認知症の方なので、金銭を持っていただくということは難しくなっている利用者が多く、実際には所持していない。できる人がいた場合には対応をする。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	コロナ禍でオンラインで電話をしたり、手紙が書ける人には、一緒に支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共同の生活空間は、全体的に解放されており、圧迫感のない、さわやかな気持ちになれるような環境設定がされている。また、その時々々の季節感を取り入れたしつらえを実践し、季節の草花や小物等を飾ることで本人にとって居心地の良い生活空間の提供に努めている。	中庭があり、明り取りの天窗のある天井は高く、どこからでも外が見え、季節感が感じられる共用空間では、利用者が思いおもいの距離を保ち、気に入った場所で過ごされている。また、多目的スペースの「花園テラス」は、利用者を含めた地域交流の場として開放されている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	その人にあった生活が実践できるように畳、コタツ、ソファなどのスペースを設け、それぞれに応じた居場所づくりを設定している。また、その中で気のあった方同士でテーブルを囲んだり、ソファに腰掛けたりする一方、個人で過ごせるような環境も提供している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居時に、本人家族と十分な話し合う時間を設けるようにしている。泊る、過ごすところは、自分の住まいとなることを意識してもらいながら、自宅から、施設へと環境が変わっても心地よく過ごせるように支援している。	ユニット毎に異なる雰囲気を作られ、居室毎に壁紙や床の色や柄が異なり、利用者の好みの品の持ち込みと相まって、各人のプライベートな空間であることが演出されている。また、各居室には洗面台と安全面から低床ベッドが導入されている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	その人の今の状態をその時々々に把握、確認し、持つ力を利用しながら、安全に安心して暮らせる環境の提供に努めている。浴室やトイレ等に関しては介護用品を設置したり動線に注意し、認知症による見当識障害のある方は場所を迷わない工夫(表札や案内板、目印)をし、サービス提供している。		

(別紙4(2))

事業所名: フラワーヴィラグループホーム

## 目標達成計画

作成日: 令和 3年 6月 1日

目標達成計画は、自己評価及び外部評価結果をもとに職員一同で次のステップへ向けて取り組む目標について話し合います。  
目標が一つも無かったり、逆に目標をたくさん掲げすぎて課題が焦点化できなくならないよう、事業所の現在のレベルに合わせた目標水準を考えながら、優先して取り組む具体的な計画を記入します。

【目標達成計画】					
優先順位	項目番号	現状における問題点、課題	目標	目標達成に向けた具体的な取り組み内容	目標達成に要する期間
1	35	年2回の防災訓練実施の他、地域との防災協力協定により、合同の防災訓練の参加、地域の避難場所としての役割も担っている。 今年度は、コロナ禍により訓練等が中止となり、終息後の再開、また今の状況に合わせた災害対策も検討していく必要がある。	年2回の防災訓練の実施により、利用者と職員が安全に避難できる方法を身につける。 今の状況に合わせ、感染症対策も含めた地域との協力体制を構築する。	年2回の防災訓練を実施し、全職員で避難方法を身につけるようする。 感染症対策を行い、地域との協力体制を関係者と確認していく。 合同防災訓練の再開時には、主体的に参加し地域との協力を継続していく。	12ヶ月
2					ヶ月
3					ヶ月
4					ヶ月
5					ヶ月

注) 項目の欄については、自己評価項目のNo.を記入して下さい。項目数が足りない場合は、行を挿入してください。